

VISION

長崎大学病院 2016.2
長崎の医療の未来を描く

file16

多様なプログラムで専門医育成へ

平成 29 年、新しい専門医制度が始まる。初期研修の 2 年間はそのままに後期研修が変わる。これまで学会主導で認定してきた専門医を、国の制度として第三者機関が取りまとめて認定することになる。つまり専門医育成の期間などが学会を超えて統一されて、さらには第三者機関が専門医を管理し評価するという、医療の質を担保する狙いがある。

地域病院と連携した多様性のある研修プログラム

「これまでの“仕掛け”に魂を入れるとき。今まで作り上げてきたシステムの運用を充実させる段階だ。そのためには地域の先生方の協力が必要」。新専門医制度導入を前に、長崎大学病院医療教育開発センターの濱田久之センター長は慎重に言葉を選んだ。地方の医師獲得には常に危機感を持って、地域全体で挑まなければならない。

新専門医制度導入に向けて、全国の病院がようやく取り組み始めたこの時期には既に、長崎大学病院医療教育開発センターは多様な研修プログラムの開発に積極的に取り組んできた。長い年月をかけて“仕掛け”をつくり、県内の医師を増やす道筋をつけてきたのだ。

平成 16 年、国の方針で新たな臨床研修医制度が始まり、研修医たちは都市部の民間病院などへと学びの場を求め、大学病院の求心力は急速に衰えた。特に首都圏へ教育の場を求める研修医が集中する一方で、地方にはほとんど集まらない状況を生み出し、都市部 VS 地方の構図を浮き彫りにした。

そんな中、本院は医療教育開発センターは専門医養成の専門部署「医師育成キャリア支援室」を平成 20 年より設立し、小畑陽子准教授を責任者とする専門医育成の体制を整えてきた。地域の病院との連携を重視して、高度・先進医療、高次の救急医療といった大学病院では学ぶことができない医療教育の現場を、地域の病院に求めた。プログラム開発において連携する医療施設は 150 カ所を超える。

新専門医制度では基本領域として 19 領域を設



けて 3 年以上のキャリアを積みば専門医として認定する。さらに細かくサブスペシャリティーが設けられ、プロフェッショナルを極めることが可能である。現在、本院の基本領域はリハビリテーション科専門医を除く 18 領域を設定している。濱田センター長は「都会には真似できない多様なプログラムづくりが鍵を握る」という。「長崎でも東京でも同じ内容なら、研修医たちは東京を選ぶだろう。この長崎でしか提供できない夢のある内容にすることが重要」と強調する。

本県での研修では人数が多くないため、医師 1 人あたりの症例数が多くなるメリットがある。また大学病院だけでなく、地域医療を担う中小の病院での研修が可能であること。そして、何よりいい指導医がたくさんいること。医師育成キャリア支援室の小畑室長は「長崎人は基本的に世話好きの人が多い。出身大学の垣根がないところは長崎の魅力」と自信を持って話す。専門医取得までをしっかりとサポートするキャリア支援体制、それも“売り”である。



若手医師の教育の中心に 大学病院の使命として

これまでの仕掛けの 1 つにハブセンターの設立がある。外科の領域が連携して外科専門医育成ハブセンターをつくったのは約 5 年前。心臓血管外科、腫瘍外科、移植・消化器外科の 3 科が連携して、外科医志望者を受け入れる枠組みをつくった。専門領域や入局先を決めかねている場合など、とりあえず外科を目指すならハブセンターに所属することが可能だ。プロフェッショナルへの歩みを止めることなく、外科専門医取得へと効率よく導いてくれるシステムである。次いで昨年には内科の分野でもハブセンターを設立した。外科専門医育成ハブセンターの江石清行センター長は「ハブセンターは本県の外科専門医制度をリードしていく立場になると思う」。病院幹部が集まる運営会議の中で話した。

一方、周産期医療の分野でも若手の人材育成は喫緊の課題である。国が重要な医療施策の分野と位置づけながら、地方での専門医確保や人材育成はかなり難しい。本県も例外ではない。

実際に都市部や東北などでは開業医の数が大幅に減少し、これまでハイリスクを担ってきた中核病院

が正常分娩を扱うようになってきている。長崎県は現在、他県に比べて開業医の数は多いものの高齢化や後継者不足のために、将来的には減少傾向にあるという。

産婦人科の三浦清徳准教授は「途切れなく若手の専門医を育成していくことを念頭に置いて、今、取り組んでいかなければ手遅れになる」と危機感をにじませる。現在、県総合周産期母子センターである長崎医療センターや県内の施設とともに、魅力あるプログラムを考えている。県内の周産期医療の担い手を育成するために本院の施設充実や魅力アップは大切な課題だと認識している。

人材育成は一朝一夕にできるものではない。社会のニーズに合った医療を提供するために専門医が必要とするなら、最低でも 10 年近くの歳月がかかる。増崎英明病院長はいう。「優秀な人材を育成する場こそが大学病院の大きな使命。育成に力を入れなければ、将来的に長崎の医療は崩壊するだろう」。ハード面、ソフト面ともに若手を受け入れる診療環境の整備は大きな課題である。